186
345

186-345
1200800018887

尺八秘義

明暗三十五世紫山著

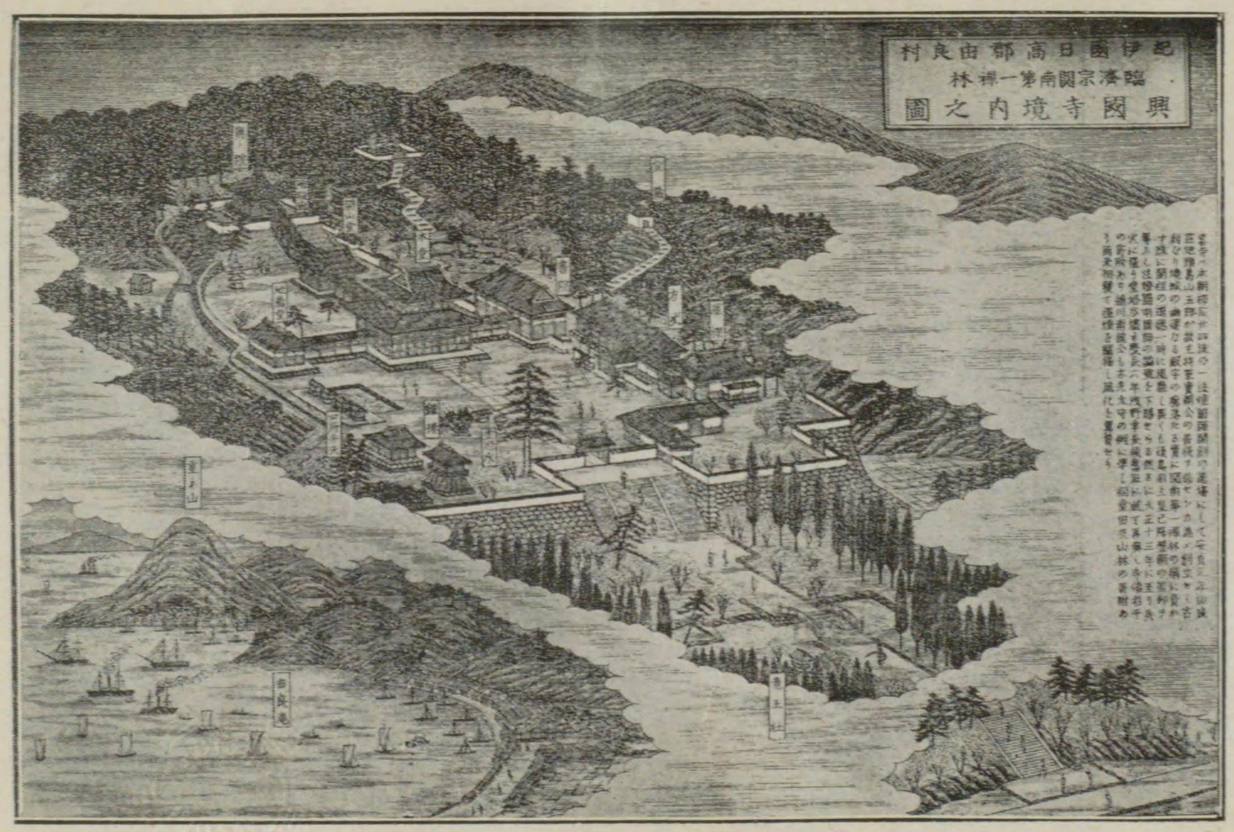
186
345

虛靈山昭靖寺開祖

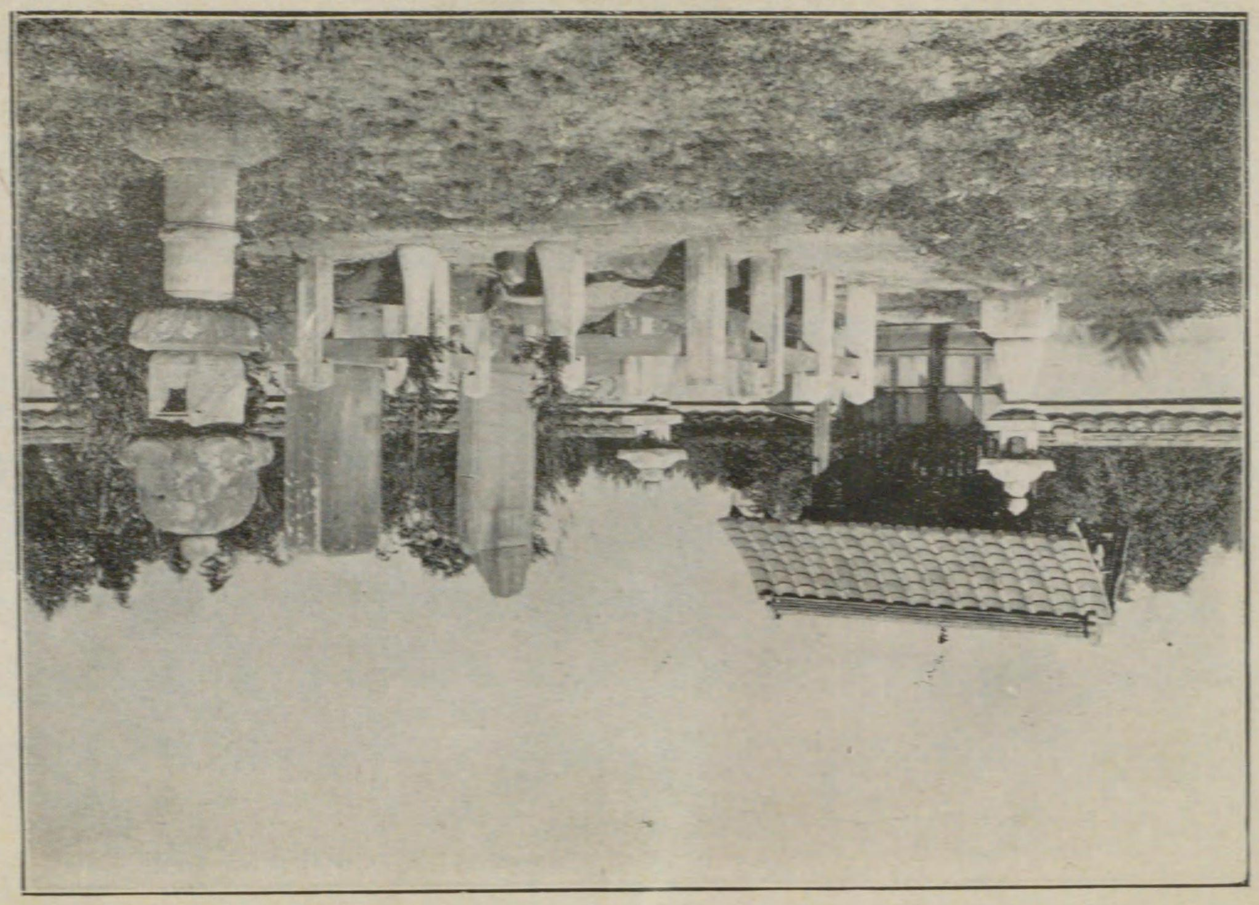
虛竹禪師像

虛靈山明晤寺開祖

虛竹禪師像



興國寺全景　（本文記事參照）



（照參事記文本）　塚　化　普

186-345

序

曩に大正五年八月明暗尺八解幷に音譜二三を發行し同好の士に頒ちたる事あり爾來專ら研究を積み續刊を爲さんとして遂に今日に及べり偶ま今夏中國、四國、九州を巡遊し具さに斯界の現狀を視察する事を得たり。然して現時尺八趣味向上の結果糸曲の吹奏に慊らざる傾向を生じ著しく本曲研究を唱導さるゝに至れるは正しく斯道の覺醒にして研究の正路に入り將に堂に昇るの楷梯たらんとするものなり。余此巡遊により修養上益する處尠からず、又斯道宣傳をも遺憾なく啓發するを得たり、頃者同人間の懇請止み難く余亦感ずる所あり。因つて研究せし音譜と俱に明暗尺八解を改訂し此に尺八秘義と改題して更に刊行する事となしたり、尙先師の遺譜になる所謂本曲的外曲ともいふべき糸曲譜をも俱に刊行する事とせり。元來糸曲吹奏は第二義に屬すと雖一面には本曲音韻自然の發露により一層雅趣あらんとするを以て幸に研究に委せんとせり。本書は本曲を主眼

大正11.2.7 10 内交

とするを以て外曲に關しては別に著述する處あるべし尙音譜については殆んど獨脩自得さるゝ迄に改訂を加へしを以て能く本文を熟讀翫味し以て深遠なる音樂味を研究されんことを

大正十年十一月于碧梧翠竹居

著者識

尺八秘義

尺八秘義目次

一緒　言……1
一尺八の由來……2
一吹奏の心得……4
一吹込の事……5
一メリカリの事……7
一餘韻の事……8
一吹き方研究……10
一運指の心得……12
一結　論……13
附　錄……音譜解說……14

尺八秘義

明暗紫山著

緒言

現時尺八趣味が一般に普及し隆盛を極むるは斯界の爲め洵に歡ばしき事なり然りと雖餘りに歌曲吹奏に偏し古來傳ふる所の本曲を閑却さるゝに至れるは遺憾に堪へず抑尺八が我國に傳來して以來終に普化宗となつて傳燈實に六百數十年に及びたるは最古の歷史を問ふを俟たず我國尺八の歷史として最も權威あり音樂上亦尊重せずんば非ざるなり然して普化宗廢絕後幾十年を經過したる今日に於て尙法音の遺響絕へざるは實に喜ぶべきことなり而して余亦專心自脩以て其至深の高調を味ひ心魂を練磨し一嘘一吹能く深玄にして神秘の靈感を味ひ得るは實に至幸と云ふべし世の尺八を愛するの士亦以て此根本精神に接觸し大悟の一境に優遊されんことを欲す今回刊行する本書及音譜は其研究に資せん

が爲なり然も本來精神的にして自由の氣宇を有するものなるを以て人々個性により研究を進め能く根本義を悟り終には曲一曲の眞價を味ひ極められんことを祈る

尺八の由來

唐の高僧普化禪師が鐸を振て

明頭來明頭打　暗頭來暗頭打　四方八面來旋風打　虛空來連架打

と唱へて常に市に出でゝ活脫自在なるものであつた　河南府の張伯は其碩德を慕ひ又鐸音の靈妙を聞き己が嗜む所の吹管に其鐸音を摹弄したのが尺八の根元になつてゐる張伯は敢て他曲を吹かず其曲なるものが遂に十六世迄傳はつたのである我朝に渡來したのは紀伊國由良興國寺の開山である法燈國師が入宋の當時丁度張伯十六世の孫張參に其鐸音なる吹管を聞き授かつて歸朝されたのである夫を法弟の虛竹に授けられたのが日本尺八の始まりである　虛竹は國師から普化明暗の本則を授かり竟に無上の大道を體得された

のである、時に左の投機の偈がある

一從截斷兩頭後　尺八寸中通古今　吹起無上那一曲　三千里外絕知音

虛竹禪師字了圓世人呼んで今普化といふ晩年山城宇治の里に其風光を賞し小庵を結び朝庵と號し優遊自適終に永仁元年七月廿八日に寂滅されたのである後ち庵後に塚を建つ里人之を普化塚と呼び今に言ひ傳へてゐる

禪師の沒後法嗣の天外明普によつて洛東に虛靈山明暗寺を創建し禪師を開山始祖として普化宗を唱へ吹管を以て法務を爲し讀經を爲さず又薙髮せず、此故に天下の武人多くこゝに歸依したものである　楠正勝公の如き南朝式微後此宗門に入り常に閼笠(てんがい)を冠り都市を逍遙し戶々に尺八を吹き歩いたので世人稱して虛無者と呼んだのである其風儀が今尙殘つてゐる

明暗寺は王政維新のとき普化宗の廢止となつた爲めに東福寺が明暗敎會として引き繼ぎ今尙虛無僧の行化を許してゐる　明暗の法系は現代三十五世にして開山沒後六百三十餘

年になる

傳ふる秘曲に三虚鈴あり曰く虚鈴、虚空、霧海篪、虚鈴とは虚竹禪師が普化明暗の本則を悟得し鐸音を吹くものなり虚空とは悟後無心空妙の處を表はしたるもの霧海篪とは霧裡の尺八を聞き道心を發するを云ふなり

吹奏の心得

姿勢が肝要である大地に生へ秡いた巨木の如く雄大に尚一秒の間隙をも容れぬ動せざる靜止沈着の態度にならねばならぬ動せぬ態度俗にいふ貧乏搖ぎもせぬ尚一呼吸も忽かせにせぬといふ處に容儀の整ひも出來自づと落付きが備はるのである　姿勢は則ち自己の規矩であり、標的となるもの故總ての動作について細心の工夫を要するものである

凡人として能く吹きたい能く聞かしたいと思ふのは人情であるが能く吹いて能く聞くといふ氣分をつくらねば本物でない、先づ自分の耳に確かと聞くといふ觀念が吹奏につい

ての第一義である幾千の聽者に向つて吹奏する自身即聽者の一人であることを忘れてはならぬ自分の耳に聞くといふ事は則自重であり反省であり精神統一であり呼吸の整調である時に香など薫じて端坐吹奏を試むべし必ず心神の爽快を覺へんかくて神秘の靈感を味ふ事が出來るのである

藝能の神に入るは難く然かも熟達に伴ふ驕慢の心は起り易し藝能の最たる者唯謙遜の心にあり尺八も畢竟心の學問に外ならぬのである

吹き込の事

口先きで吹かぬ樣腹で吹けとは一般に通じて云ふ事であるが兎角口先きで吹く夫は糸曲を拍子で覺へ込むから自然と呼吸が忙はしふなり初心の間は口先きで譜を讀むといふ吹き方になる隨て唇に力が入り細いやさしい吹き込みになる縱や如何に强く吹いても口先きの力では到底管を吹き割る底の滿ち々々た豪壯な息は吹き込む事は覺束ない眞の吹き

込みといふのは太い強い巾の廣い息を唯眞直に吹き何處迄も悠々として弛みのない底力の籠つた息が急ならず緩ならずといふ處にある試に唇の力を去り此吹き込みを爲し力は何れに入るかを思へば必す下腹にこたへがある

充分に吹くには充分に息を引く事である出す息より引く息が最も大事である吹く息きには曲に應じて長くも短かくも調節は出來るが音と音との瞬間の引く息則息の繼ぎ目の働らきが至難で曲全体の死活に關係するのである此大切な處を悟るのが吹込みの要件である

引く息は下腹を脹らす一瞬に腹一杯に滿ちるもの夫を確と下腹に力を込めて吹き出すのである、これが則腹から吹く餘裕のある息である

秋風の樹木を掠めるかすれた音や鐘を撞いた刹那の力の籠つた音や蓮の花の開く微妙な爽やかな音のよふに樣々變化のある音韻は此吹き込みの要領を悟らずしては眞に吹き味ふ事は出來ぬのである

然し初心者は力の限り息の續く限り竹管の破れん計りに吹き込む事をせねばならぬ最初から此理屈を覺へて技巧を弄すると大成はせぬ劍道の初めに打ち込みを習ふと同樣で正々堂々と吹き込みの練磨をせねばならぬ

力任せに吹いた息では音が棒切れになり、吹かずに吹けた息は其音が糸より細く斷續綿々として自然の妙味が出る

曲を吹くと思ふよりも音を味ふ心持で研究すれば息がのんびりとなつて曲は自づと吹けるものである

メリカリの事

（附錄參照）

顎を俯向いて吹き次第に仰向けば其音は低律より高律になる事を知らん其低きがメリ高きがカリにて甲乙兩音ともに律の高低をいふのである初心者は音の大なるをカリ小なるをメリと誤解してメリには細い弱い息を出す癖がある甲乙兩音ともに太い強い力の入つ

た息で吹かねば眞の音は出ぬ所謂息は飽迄眞直にして**メリカリ**は顎や指の作用で自然と音に表はれ變化するものなれば口先きの細工で息を細めたり弱めたりする事は絶對に惡い又口先きで吹いた音は奇麗に鳴つてゐる樣でも全く上は走りの底力のない風引き聲の樣である

メリカリは音の上の綾であり抑揚であり變化である激湍巖を嚙むの水勢も(**カリ**の味ひ)終には深淵渦を爲すの洋々たるが如く(**メリ**の味ひ)そこに自づから清澄の氣が充實してゐる**カリ**の高調は天に通ずるの氣があり**メリ**の整調は地に徹するの思ひがある一曲を爲す豈一貫したる氣韻がなけぬばならぬ

餘韻の事

鐘を撞いた刹那から音響の納まりを味へば能く會得する事が出來る鐘に撞木が打ち當ると力强い唸りが起る其唸りの最高の鳴り擴がつた處出る丈けの音が出で仕舞た處から後

の音響が自然に餘力で鳴つてゐる此自然に餘力で鳴つてゐる處を餘音といふのである則最高音から自然に鳴る夫からが餘音である

夫で吹き込みと云ふ撞木が歌口へ吹き當ると丁度鐘の鳴り擴がつた最高音から自然に納まると同じく尺八も吹き込みの充實した最高の處より後は則餘音である吹いては成らず吹かずしては鳴らずと云ふ則下腹の力一つで息を押しこたゆる處に整調より清澄に移り餘韻嫋々となるのである之は一音の餘音則一息の納まりであるが茲に一例を擧げるとすれば

ハハーハ、の四拍子の一節あり初めハの一拍子に於て最高調迄吹き込み續きの**ハーハ**の三拍子は皿餘音で吹くのである然し吹くと云ふても殊更に息を吹き入れるに非ず餘力で自然に吹けるのである故に吹き込みの力が充實せずば餘力あるなし要するに此一節の吹き味ひが連續して終に全部に亘り一曲を爲す所以である此吹き振りを知らず徒らに口先きで力任せに捲吹きにすれば丁度掌で鐘を叩いてゐる樣なもので音も出切らず勿論餘音な

どある筈はない

亦音と音との間合や吹き納め行く無音の處を味はねばならぬ夫は靜かに息をころし耳を澄ます處に無聲の聲を聞き無韻の韻を味ふの境地に至るもので又以て餘韻を樂む所以である

餘韻といひ餘力といひ餘光といふ畢竟皆充實したる力である國威の擴大これ餘力であり祖先の恩澤これ餘光である力には奥行があり淺い短い貧弱なものではない

宇宙悉くが力であつて生命が存するのであり人間の入る息出づる息に無限の眞理がある

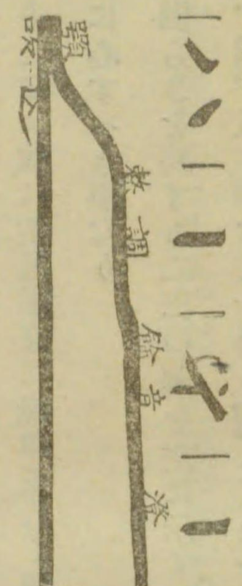
何ぞ吹管の上に其眞理の奥秘を極め味はんとはせざる

夫一管の音韻たるや天地に冥合し萬有の一體を靜觀するの宏大深奥なる理想鄉の開拓であるでは無いか

吹き方研究

尺八は音其ものが第一であるから研究は先づ一つの孔について口ならば口と專心にメリカリ及びそれ以外にそれだけの變化があるかを吹き試み練習を積む事が肝要である初心者は勿論熟達の人と雖研究を要す曲は百回以上吹奏し尙眞價を窺ひ難きに然も一節の練習倦み易し心せよ

第一圖（例）



……四拍子の一節

……顎は中庸よりカリとなる

……吹込は眞直

解（第二例）

……四拍子の一節

……顎はメリよりカリに移りメリに戻りカリに終る

……吹込は眞直

吹込音、整調音、餘音、澄音、此四音の吹き加減を會得すれば吹曲自在なるべし

一音の内に此變化ある吹方を練磨研究し尺八の眞の音律を味ふべし

（餘韻參照）

運指の心得

俗に云ふ添へ指、無駄な指を動かす事は絶對に惡い非常に品位を殺ぐのみならず正確なる言調をそこなふ故に飽迄率直に規律正しく運指を爲す事は音律に多大の關係を有するを以て常に心すべき事なり

指の働らきを要する二三の例を左に示す

ロ。二、四、五を明けて一時に**ロ**とふさぐ

レ。一、四を明けて**ツレ**と四をふさぐ

イ。三、四を明けて**ハイ**と五を輕く打て明ける

ハ。二、三を明けてと**ハ**と二をふさぎ一を輕く押す

結論

一呼吸の眞理、一孔一孔の變化音調の清澄是等の味ひを綜合し悟るに至て始めて尺八は吾物となり萬有一體と云ふ事が感ぜらるゝのである、そこに潤澤があり自由があり權威があり信念となるのである。然して其信念の心の調べこそ則いふ處の吾尺八本曲である

尺八秘義（終）

附錄

音譜解說

○音譜

裏

	同音連續							
	二押ス	二押ス	三押ス	四押ス	五押ス	五打ツ	四押ス	五計リ	五計リ	三計リ
五	●	●	●	●	●	○	●	○	○	●
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
四	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●
三	●	●	●	○	○	○	○	●	●	○
二	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●
一	●	●	●	○	○	○	●	●	●	●
	ロ	ツ	レ	チ	ハ	イ	ウ	イ	ヒ	井
	甲乙							甲	甲	乙

連續別音譜

裏

	ヒ	フ	ウ・	ハ・	チ・	ウ・	レ・	ツ・	ラ・
				ラ・	リ・	ル・	ヱ・	ル・	
五	●	●	●	●	●	●	●	●	○
…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
四	●	●	●	打四 ○ラ	●	●	●	●	●
三	●	●	打三 ○ウ	○	○	○	●	●	●
二	●	●	●	●	○	●	○	●	打二 ○ラ
一	●	●	○	●	打一 ○リ	○	打一 ○ル	打一 ○ヱ	打一 ○ル
			甲	甲	甲	甲	甲	甲	乙
			乙	乙	乙	乙	乙	乙	
	甲								

裏

	五	四	三	二	一	
ハラロ	○	○	●	○	●	ハ
	○	○	●	打二○	●	ラ
	●	●	●	●	●	ロ
						乙 乙 甲
ヤラヤラ（急）	●	○	○	打○ラ	打○ヤ	
						甲
ホロホロ（急）	○	●	●	●	○	ホ
	○	●	●	○	●	ロ
						乙
ホロイ	○	●	●	●	●	ホ
	○	●	●	○	●	ロ
	●	●	●	●	○	イ
						乙

○拍子符及記號

譜の文字を大小細の三種に區別し拍子を定む

大 口 一拍子　小 口 半拍子　細 口 四半拍子

（一拍子は一秒時をいふ）

拍子符號

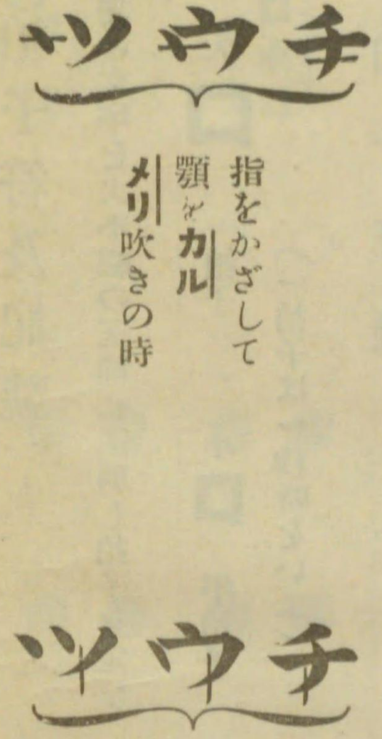
○	一拍子	（休止）
◐	半拍子	（休止）
◔	半拍子	（連續）
ん	二拍子	（連續）

｜	一拍子	（連續）
‖	二拍子	（連續）
‖｜	三拍子	（連續）

メリを一拍子カリを一拍子メリよりカリに移る

○記號の事

メ（メリ）　カ（カリ）　ス（スリ）　ウ（浮）



（息繼ぎの記號）文字の下たに横線あるは息の切れと知るべし

（拍子外れ記號）

大字より細字へ曲線を引きたる細字は拍子に入らざるものとす

指をかざして顎をカル　メリ吹きの時

指を全開して顎をメル　メリ吹きの時

○メリ　カリ　スリ　浮　附點の事

メ　全部メリ

メ　カ　メリより直ちにカリに移り終りをメル

（右位置にメカの變化はあるべし）

ス　ハ　すり指にて自然にメリよりカリに移る

カ　メ　カリ吹きにて終りをメル

カ　メ　メリより直ちにカリに吹く

ウ　ハ　太き息にて輕く浮きたる樣に吹く

○チ、ウ、ツ、メリの事

此三音は多くの場合メリ吹きなれば特にメの記號を附せざるを以て總てをメリと知るべし

但し左記の場合のメリに注意する事

チメ　下に記號あるはメリに吹きて尙メル故大メリと知るべし

チメカ　此カリ吹きの場合下のメリは普通メリと知るべし

（ウツ）之に準す

○連續音（拍子制限なし）

ロ　同音連續（各音各其運指法によるべし）

ロ　同音メリカリ相互連續にて顎にてユルなり

外にホロホロヤラヤラ其他の連續音は夫々の運指法によるべし

○かざし指の事

チウツに必ず常用すべしメリの場合多き故なり

指を管に添へて孔の眞上へかざすものにて半開にはあらず

（半開とは指を上へ又は下たへにぎりて明けるものにて用ひず）

○顎づかひ及フリユリの事（メリカリは本文參照）

俗に顎振り三年といふフリの事はこれは甚だ微細に亘る事にて反つて誤解惡癖を生ずるを以て特に解說せず

ユリを用ゆる事は上達者の吹き振りにて猥りに用ゆるを好まず

これは微細なるユリの事にて大ユリには非ず初心者の眞似るをいましめ置くのみ

○中メリと大メリ

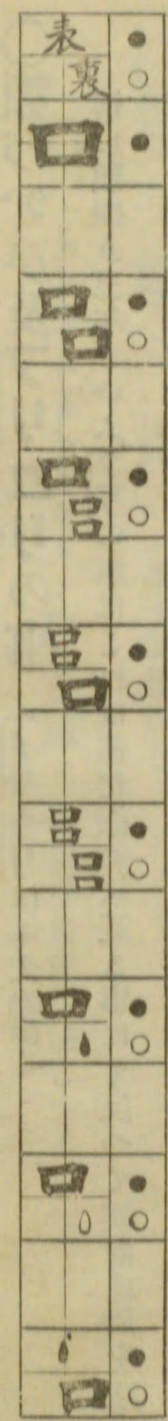
中メリは普通に吹きて指をかざす大メリは顎も俯せ指もかざすなり

此大體の標準を練習して他の變化に及ぼすべし

○息繼ぎの事

息切りの記號を附したる一節の中に尙こまかに一節々々を文字に於て自然に心して間隔し分ちあるを以てこれにて抑揚を知り息の長短を加減し心して吹奏練磨すれば自づと會得すべし

○間拍子（一拍子）の例

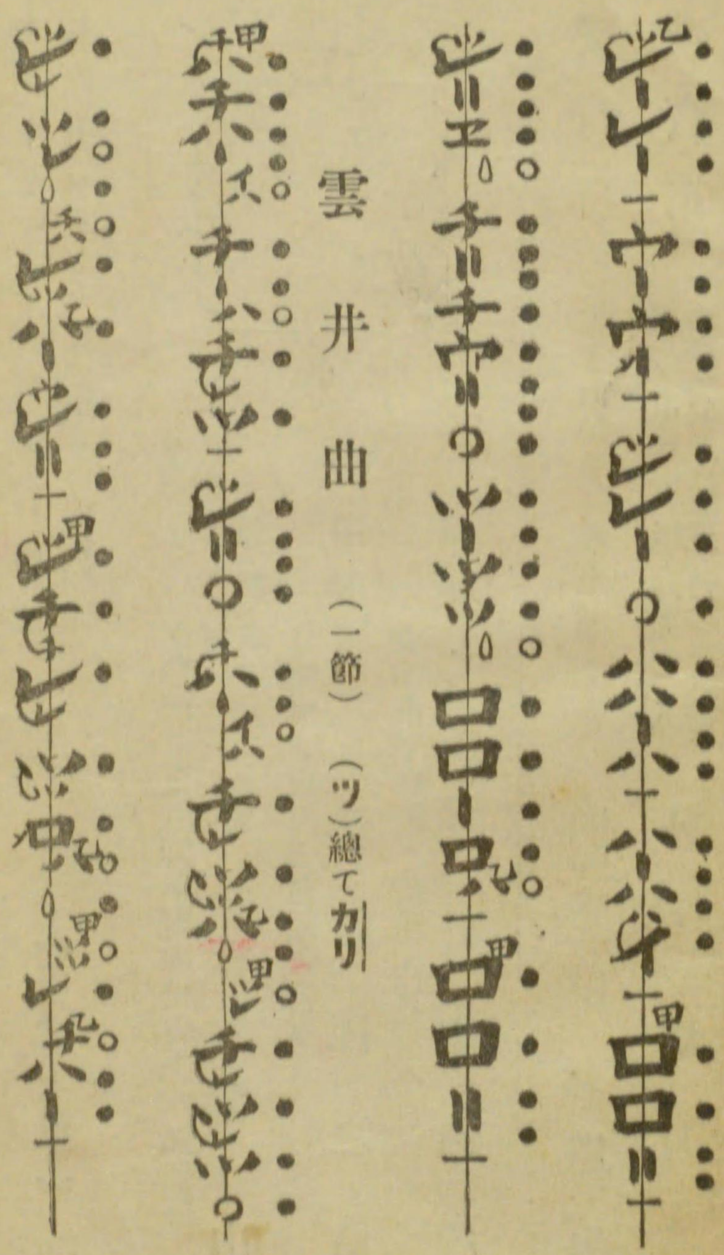


線の中心の文字及符號を表拍子とし横の文字及符號を裏拍子とす

（細字は必ず偶數となりて半拍子を表はす事を記憶せよ）

○曲譜一例

調子（一節）



雲井曲（一節）（ツ）總てカリ

此線及点々は唯研究練習の便宜上表はせり

大正十年十一月二十日印刷
大正十年十一月廿五日發行

【定價金七拾錢】

不許複製

著作兼發行者　京都市下京區御幸町佛光寺上ル九屋町　小林紫山

印刷者　京都市下京區三哲通大宮東入　三好德之助

印刷所　京都市下京區三哲通大宮東入　三好印刷所

發行所　京都市御幸町佛光寺上ル　明暗根本道場

發賣所　京都市松原通烏丸東入　井上清月堂
振替貯金大阪五五三五九番